調査研究
高校国語科 新学習指導要領における言語活動の充実
～伝え合う場の設定による思考力・判断力・表現力を高める授業展開～

アンケート調査結果

長崎県教育センター
教科・経営研修課　高校教育研修班
畑野公昭

１　アンケート調査の目的

県立高等学校の国語科における「言語活動」の取組状況や生徒の国語学習の実態等を把握し、よりよい学習指導に向けた支援の充実・改善に資する。

２　アンケート調査の概要

(1)　調査対象校　　県立高等学校　５６校
(2)　回答者　　各学校各課程の国語科主任　６６名（回収率１００％）
(3)　調査期間　　平成２６年１月１４日（火）～１月３１日（金）
(4)　調査内容　　①生徒の国語学習の実態について
②言語活動の取組状況について
③言語活動の工夫について
(5)　備　考　　回答は基本的に国語科主任が行うが、必要な部分については教科担当者の取組や状況等も確認して回答する。

３　アンケート調査の結果と分析の概要

(1) 生徒の国語学習の実態について

①「話し合いや意見交換をする積極性や主体性」はやや高まる傾向。
②「話し合いや意見交換の内容や質、自らの考えを表現する力」はやや低下する傾向。
③「文章を理解する力」は低下傾向。
④ 年齢に相応した語彙力や漢字の読み書きの力の低下が顕著。

(2) 言語活動の取組状況について

①国語担当者の「言語活動を効果的に取り入れた授業づくり」や「言語活動の新学習指導要領における位置付けや扱い」は概ね進んでいる。
②国語科として年間の言語活動を全学年で計画している学校は３割。
③言語活動と「論理的思考力、表現力」「伝え合う能力」「感性や情緒」の育成との関連は概ね図られている。
④言語活動の新たな連携の強化、授業や評価方法の改善、国語科の役割の明確化が必要。

(3) 言語活動の実践事例について

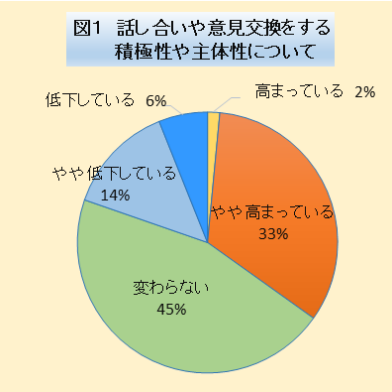
①伝え合う場づくりや「話す・聞く」言語活動の工夫はペア・グループ学習中心。
②「書く」言語活動の工夫は「意見・小論文の作成」と「短歌・俳句の創作」中心。
③「視写」「聴写」を通した語彙力の強化等の取組に注目。
④「読む」言語活動の工夫では「音読・朗読・暗唱」と「作業読み」が中心。
⑤言語活動でＩＣＴを活用している学校は約３割。

４　アンケート調査の結果と分析

(1) 生徒の国語学習の実態について

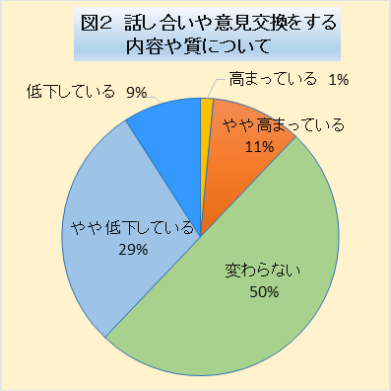
現在、在籍している生徒の国語に関する実態について、それ以前の生徒と比べて感じていること

Ｑ１　話し合いや意見交換をする積極性や主体性について
ア　高まっている　イ　やや高まっている　ウ　変わらない　エ　やや低下している
オ　低下している



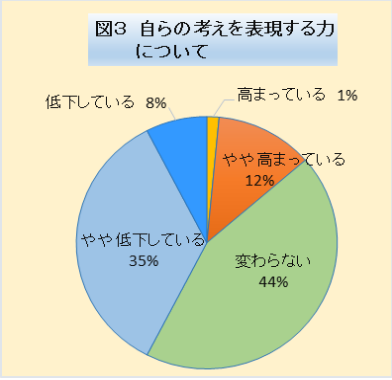
【結果分析】
●「変わらない」が 45%と最も多いものの、残りは「高まる傾向」（高まっている･やや高まっている）35%と「低下傾向」（低下している･やや低下している）20%とに二分した。
●「高まる傾向」について、全日制普通科設置校間では 49%だが、専門・総合学科校間では 24%、定時・通信制校間では 16%と課程・校種間で差があった。
●「低下傾向」について、定時・通信制校間で 34%、全日制普通科設置校間で 21%だが、専門・総合学科校間は 10%と少なかった。

Ｑ２　話し合いや意見交換をする内容や質について
ア　高まっている　イ　やや高まっている　ウ　変わらない　エ　やや低下している
オ　低下している



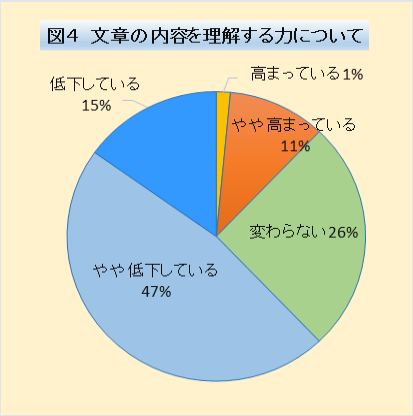
【結果分析】
●「変わらない」が 50%と最も多かったが、38%が「低下傾向」と回答し、「高まる傾向」は 12%にとどまった。
●「高まる傾向」について、全日制普通科設置校間、定時・通信制校間ではともに 18%だったが、専門・総合学科校間では０%であった。
●「低下傾向」については、全日制普通科設置校間で 36%、専門・総合学科校間で 43%であった。定時・通信制校間は 34%と相対的にやや低かったが、「低下している」の割合は 17%と高かった。

Ｑ３　自らの考えを表現する力について
ア　高まっている　イ　やや高まっている　ウ　変わらない　エ　やや低下している
オ　低下している



【結果】
●自らの考えを表現する力は、「変わらない」の 44%と「低下傾向」の 43%が拮抗し、「高まる傾向」は 13%にとどまった。
●「高まる傾向」については、全日制普通科設置校間の 18%に対して、専門・総合学科校間は９%、定時・通信制校間は８%と相対的に低かった。
●「低下傾向」については、全日制普通科設置校間 36%、定時・通信制校間は 42%だが、専門・総合学科校間は 53%と５割を超え、相対的に高かった。

Ｑ４　文章の内容を理解する力について
ア　高まっている　イ　やや高まっている　ウ　変わらない　エ　やや低下している
オ　低下している



【結果分析】
●文章の内容を理解する力は、「低下傾向」が 62%と６割を超えた。「変わらない」は 26%で、「高まる傾向」は 12%にとどまった。
●「高まる傾向」については、全日制普通科設置校間で 21%と相対的に高く、都市部以外の学校の回答が中心であった。一方、専門・総合学科校間は５％、定時・通信制校間は０％であった。
●「低下傾向」については、全日制普通科設置校間で 61%、専門・総合学科校間で 66%、定時・通信制校間で 59%であった。「低下」と「やや低下」の割合は課程・校種間でほぼ同じであった。

Ｑ５　高校に入学した段階の生徒の国語の学力や学習態度、言語活動面での特徴的なことや顕著な傾向があればお書きください。

【主な回答のまとめ】

学力や態度、言語活動への取組等でよく身に付いている面
〇〇話し合う活動は、積極的、意欲的な態度で活発に取り組むことができる。

学力や態度、言語活動への取組等で課題となっている面
●●●●年齢に相応した語彙力や漢字の読み書きの力が低下している。
●●基礎・基本の力が低下し、一般常識が不足している。
●読書の質・量が不十分である。
●教師の発問や他者の意見などを聞く力が不足している。
●話し合いは活発だが、他者にわかりやすく話したり、内容を深めたりすることができない。
●文章を叙述に即して読む力が不十分である。
※〇●１つにつき　１～１０例

（注）アンケート調査の結果・分析における課程・校種別のグループ分け
全日制普通科設置校（３３校）　長崎東　長崎西　長崎南　長崎北　長崎北陽台　佐世保南　佐世保北　佐世保西　宇久　島原　諫早　西陵　諫早東　大村　猶興館　松浦　対馬　豊玉　上対馬　壱岐　五島　五島南　奈留　大崎　西彼杵　国見　小浜　口加　川棚　波佐見　北松西　上五島　中五島
専門・総合学科校（２０校）　島原農業　諫早農業　北松農業　西彼農業　長崎工業　佐世保工業　鹿町工業　島原工業　大村工業　佐世保商業　島原商業　諫早商業　壱岐商業　長崎明誠　佐世保東翔　大村城南　平戸　五島海陽　島原翔南　清峰
定時･通信制校（１１校）　鳴滝夜間　佐世保中央夜間　島原定時　諫早定時　大村定時　長崎工業定時　佐世保工業定時　鳴滝中間定時　佐世保中央中間定時　鳴滝通信　佐世保中央通信

☆「生徒の国語学習の実態」の分析のまとめ

①「話し合いや意見交換をする積極性や主体性」はやや高まる傾向

話し合いや意見交換をする積極性や主体性は、「変わらない」が 45%と最も多いものの、「高まる傾向」は 35%、「低下傾向」は 20%と「高まる傾向」にややシフトしている。（**図１**参照）特に、全日制普通科設置校間では約５割が「高まる傾向」と回答した。一方、定時・通信制校間では「高まる傾向」が 16%、「低下傾向」が 34%と逆転しており、課程・校種別に差が見られる。Ｑ５「高校に入学した段階の生徒の国語の学力や学習態度、言語活動面での特徴的なこと」においても、よく身に付いている面として、「話し合う活動は、積極的、意欲的な態度で活発に取り組むことができる」といった回答が 12 例ほど挙がっている。ただし、この回答も全日制普通科設置校からの回答が多い。

②「話し合いや意見交換の内容や質、自らの考えを表現する力」はやや低下する傾向

話し合いや意見交換をする積極性や主体性はやや高まる一方で、話し合いや意見交換の内容や質、自らを表現する力は、図２、３より、「高まる傾向」より「低下傾向」にシフトしていることが読み取れる。

③「文章を理解する力」は低下傾向

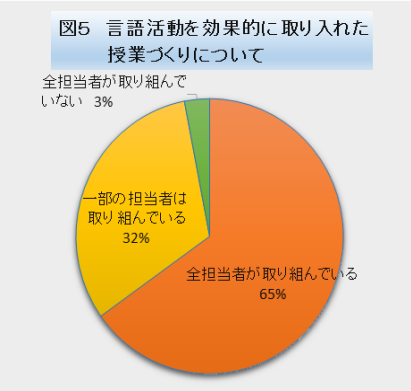
主体的に「自己表現」する意欲はやや高まる傾向にあるが、文章を理解するといった「他者理解」は、図４によると６割が「低下傾向」と感じ、「高まる傾向」と感じる約１割と大幅に差が開いた。

④ 生徒の語彙力・漢字力の低下が顕著

Ｑ５の回答では、言語活動面でよく身に付いている点として「話し合う活動は、積極的、意欲的な態度で活発に取り組むことができる」といった回答が 12 例ほど挙がっているが、一方で「年齢に相応した語彙力や漢字の読み書きの力が低下している」。といった回答が 36 例ほどあり、強い危機感を抱いていることがうかがえる。話し合いをしても、妥当な根拠に基づいた建設的、創造的な結論を生み出せないならば、短絡的、感情的な自己主張に固執するか、次元の異なった他者の意見に迎合するかの二つの方向に流れてしまいがちになる。中学校までの言語活動のねらいや取組を十分踏まえた上で、学校の実態に合わせた計画的な学習活動と語彙力の育成が必要である。

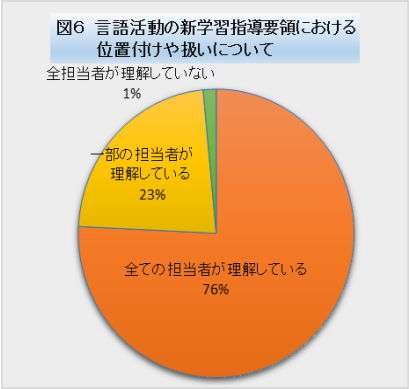
⑵言語活動の取組状況について

Ｑ１　言語活動を効果的に取り入れた授業づくりについて
ア　全担当者が取り組んでいる　　イ　一部の担当者は取り組んでいる
ウ　全担当者が取り組んでいない



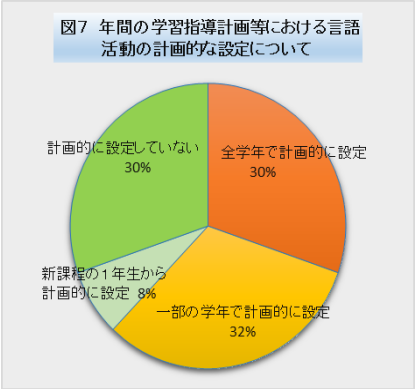
【結果と分析】
●「取り組んでいる」が「全担当者」、「一部の担当者」合わせて 97%であった。
●「全担当者が取り組んでいる」が約３分の２を占めるが、残り３分の１の学校は担当者によって取組に差が生じており、担当者間での情報交換や可能な方法から取組を始める等の対応が求められる。

Ｑ２　言語活動の新学習指導要領における位置付けや扱いについて
ア　全担当者が理解している　　イ　一部の担当者は理解している
ウ　全担当者が理解していない



【結果と分析】
●「理解している」が「全担当者」、「一部の担当者」合わせて 99%であった。
●言語活動の新学習指導要領の位置付けや扱いへの理解はかなり浸透しているといってよい。ただし、約４分の１の学校では理解度に差が生じている。
●理解の差は、言語活動を効果的に取り入れた授業づくりや計画立案とも関連する。理解が十分でない場合、学習指導要領解説や関係資料を確認する、教科会等で共有するなどの対応を早急に取る必要がある。

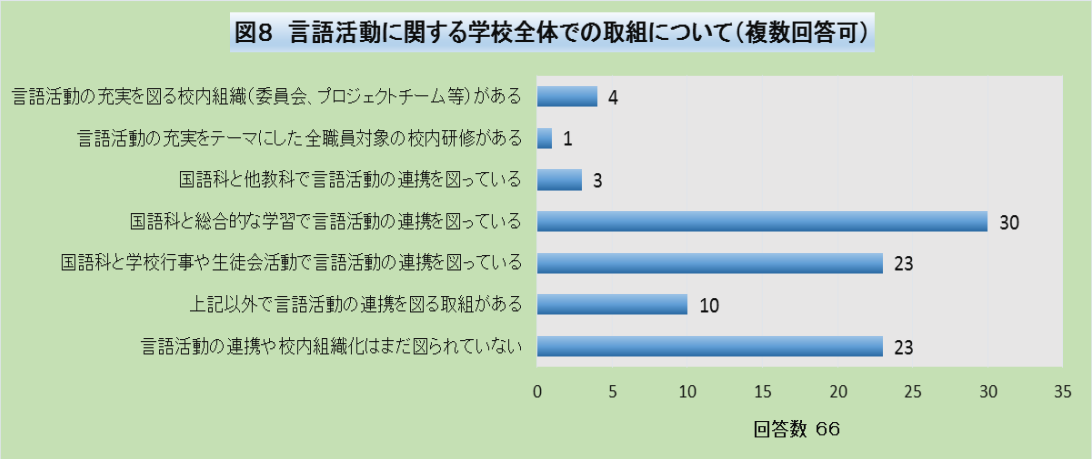
Ｑ３　年間の学習指導計画等における言語活動の計画的な設定について
ア　全学年で計画的に設定している　　イ　一部の学年で計画的に設定している
ウ　新課程の１年生から計画的に設定している　　エ　計画的に設定していない



【結果分析】
●「設定している」は「全学年」、「一部の学年」、「１年生」を合わせて 70%、「設定していない」が 30%であった。
●「全学年で設定している」は３割にとどまった。言語活動の位置付けや扱い、授業での取組に比べて年間での計画はまだ十分に進んでいない。
●身に付けさせたい言語能力とふさわしい言語活動の組み合わせは、学校の実態に応じて様々なケースがあり、国語科以外の部署との連携や「話す・聞く・書く・読む」の力をバランスよく育成するためにはまず計画の必要性を認識することが重要である。

Ｑ４　言語活動に関する学校全体での取組について（複数回答可）

ア　言語活動の充実を図る校内組織（委員会、プロジェクトチーム等）がある
イ　言語活動の充実をテーマにした全職員対象の校内研修がある
ウ　国語科と他教科で言語活動の連携を図っている
エ　国語科と総合的な学習で言語活動の連携を図っている
オ　国語科と学校行事や生徒会活動で言語活動の連携を図っている
カ　上記以外で言語活動の連携を図る取組がある
キ　言語活動の連携や校内組織化はまだ図られていない



※上記ア～カと回答された方は、その具体的な内容をお書きください。

【回答のまとめ】

具 体 的 な 内 容
ア　言語活動の充実を図る校内組織（委員会、プロジェクトチーム等）がある ・ＣＤＡ委員会（社会について学び、社会と主体的に関わる自己のあり方を考える。ＣＤＡ学習を企画・実施。小論文の軸とした学習の中でグループワークなど） ★ＣＤＡ学習…進路実現のための「総合力」育成プログラム Ｃ：Comprehension　理解　Ｄ:Discovery　発見　Ａ:Ambition　志） ・スピーチ委員会（全学年による SHR における一分間スピーチの実施） ・小論文委員会（３年推薦入試対応）
ウ　国語科と他教科で言語活動の連携を図っている ・商業科と、経済事情について小論文・プレゼンテーションを指導。 ・総合学科の「産業社会と人間」「自己開発Ⅰ・Ⅱ」、水産科の「課題研究」において、発表大会（展示等も含む）を設定。
エ　国語科と総合的な学習で言語活動の連携を図っている ・小論文指導　・意見文作成　・ディベート　・ＮＩＥ活動　・志望理由書 ・面接練習　・敬語の学習　・表現方法の練習　・文章書写 ・「耳をすます時間」という活動の中での様々な文章の聞き取りと発表。 ・「表現力養成講座」を設置し、国語科と学年で連携して言語活動の充実を図る。 ・「郷土研究」や「国際交流」での調べ学習と発表会での発表。 ・学部学科研究や企業研究など進路研究の後のスピーチ・プレゼン・質疑応答。 ・創造Ⅱや創造Ⅲでの発表会。また、創造Ⅲでの国語に関する研究活動。 ・全職員が当番制で選んだ文章（B４判１枚程度）を読ませ、感想を書かせる。 ・アルバイト発表会の実施。

オ　国語科と学校行事や生徒会活動で言語活動の連携を図っている

・校内百人一首大会　・校内弁論大会　・校内読書感想文コンクール
・朝の読書　・文化祭での研究発表会　・学校行事や講演会の感想文作成
・校内意見発表会
・読書感想文の各クラスの優秀作を放送部に校内放送で読んでもらい、生徒・教職員全員で評価して、最優秀作などを選出。
・農業祭での生徒の短歌展示、農高百首かるた大会。
・生徒会主催のボランティア活動として地域の独居老人への年賀状作成。
・週に１日、国語科で準備したプリントの担任からの「読み聞かせ」。
・校内生活体験発表大会（生徒会主催）に向けて、全員が原稿作成。
・県内定時制通信制高校が参加して行われる「生活体験発表会」に向けて、毎年度国語の授業で作文指導をし、学校代表者を選出するための校内発表会（生徒会主催）を実施し、書く・話す・聞くという一連の指導をしている。
・本校独自の「四字熟語かるた大会」の実施。

カ　上記以外で言語活動の連携を図る取組がある

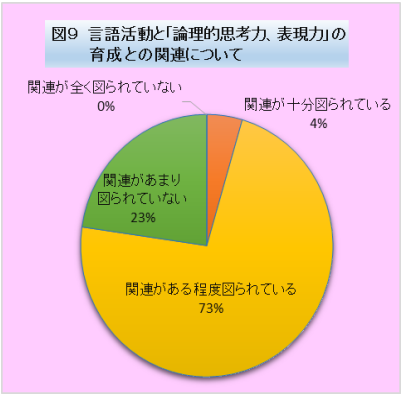
・ＳＳＨ研究発表におけるステージ発表やポスターセッション、ディベート等
・進路指導部との連携　・全校一斉の漢字力テスト
・ビジョントレーニング、速記練習　・地域の弁論大会参加
・小中高一貫教育を実施しており、各校種の国語科の教員が集まり、公開授業や研究授業、教育活動に関する意見交換などを行う。
・１年次または２年次に全員が漢字検定を受検。
・全教科における公開授業のポイントとして「『言語活動の充実』を図った授業作り」を掲げる。
・進学希望者に対する小論文指導への全職員による取組。

【結果分析】

●総合的な学習との連携が半数弱、学校行事や生徒会行事との連携が約３分の１であった。既存の枠組みの活用を図る一方で、校内組織の整備や他教科との連携はほとんど進んでおらず、校内組織化そのものが図られていない学校も約３分の１あった。
●新学習指導要領に添った言語活動を進める校内組織の整備と連携強化が急務である。

Ｑ５　国語の授業における言語活動と「論理的思考力、表現力」の育成との関連について

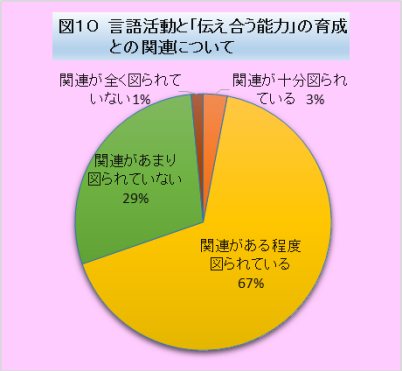
ア　関連が十分図られている　　イ　関連がある程度図られている
ウ　関連があまり図られていない　　エ　関連がまったく図られていない



【結果分析】

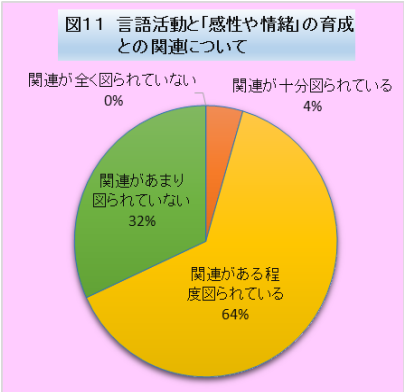
●「関連が図られている」は、「十分」と「ある程度」を合わせて 77%で、「あまり図られていない」が 23%、「まったく図られていない」が 0%であった。
●８割弱が「関連が図られている」と回答しているが、そのうち「十分に」はわずか 4%に過ぎない。
●関連性を高めるためには、様々な言語活動に取り組むプロセスにおいて、理由や根拠等の妥当性を十分に考える機会を持たせるような工夫が必要である。

Ｑ６　国語の授業における言語活動と「伝え合う能力」の育成との関連について
ア　関連が十分図られている　　イ　関連がある程度図られている
ウ　関連があまり図られていない　　エ　関連がまったく図られていない



【結果分析】
●「関連が図られている」は、「十分」と「ある程度」を合わせて 70%で、「図られていない」が「あまり」と「まったく」を合わせて 30%であった。
●「関連が十分図られている」はわずか 3%に過ぎなかった。
●関連を図るためには、まずペア学習やグループ学習など取り組みやすいところから入る、書いたものを読み合い評価や感想を書く等、双方向的なコミュニケーションを図る場の設定を工夫してみる。

Ｑ７　国語の授業における言語活動と「感性や情緒」の育成との関連について
ア　関連が十分図られている　　イ　関連がある程度図られている
ウ　関連があまり図られていない　　エ　関連がまったく図られていない



【結果分析】
●「関連が図られている」は、「十分」と「ある程度」を合わせて 68%で、「図られていない」は、「あまり」と「まったく」を合わせて 32%であった。
●「論理的思考力・表現力」の育成と比べて、関連を図る割合がやや低かった。また「関連が十分図られている」は 4%に過ぎなかった。
●表現の土台となる語彙力の育成はもちろんのこと、テキストを読んだ感想の他、鑑賞文や批評文、創作、体験にもとづいた作文などを書く機会を増やしたり、表現の説得力を高めるたけの推敲過程の充実や相互評価を図る取組を工夫してみる。

Ｑ８　言語活動の授業での活用や、中長期的な計画、他教科等との連携を図る上で、課題となっていることをお書きください。

【回答のまとめ】

① 言語活動の充実のための時間や担当者の確保
・授業を進めることが優先。・基礎的な内容が優先。・授業時数、単位数の不足。
・指導時間の不足。　・教材研究を含めた十分な準備の時間が不足。
・朝読及び総合的な学習の時間以外の時間創出が困難。　など

② 国語の授業や評価方法の改善～効率化と多様な生徒への対応
・「話すこと･聞くこと」「書くこと」「読むこと」のバランスと連携の工夫。
・「書く」活動に偏る。　・生徒の成果物を限られた時間で処理する必要。
・発達障害の生徒、学力差の大きい生徒、集中力の欠けた生徒等への対応。
・言語活動の客観的な評価の観点の設定。　・授業でのＩＣＴの効果的な活用。
・「国語表現」以外での言語活動の在り方。　など

③ 課程・校種に応じた中長期的な計画立案
・臨時採用の教員・時間講師との計画立案や協働での取組が困難。
・年間計画を見通し、総合学科発表会などの発表資料作りの効率化を図りたいが、行事等の都合から設定することが難しい。
・単位数が少なく、また病気や仕事・アルバイトのために欠席をする生徒が多いので、中長期的な計画が立てられない。
・（定時制の）生徒の現状に応じた指導が中心となり、計画の立案や、取り組みの継続に対する難しさがある。
・（参考とする）言語活動の実践例がまだ乏しい。　など

④ 他教科や学校行事等との連携を図る学校全体での組織的な取組
・他教科の研究授業等を参観して国語の取り組みの参考にしている。
・言語活動の内容や重要性が全職員に理解されていない。
・教科間で求めるものが同じであれば、方法などの共有はできる。
・教科を越えた計画や話し合い、共有の機会や組織が現段階ではない。
・委員会等が主導する形でないと難しい。
・ＩＣＴ機器を活用した授業実践の情報交換から教科間の連携が期待。　など

⑤ 言語活動における国語科の役割の明確化
・国語科が他教科の言語活動をどのような形で支援するか。
・学校行事や生徒会活動との連携を国語科としてどのように図るか。
・「言語活動＝国語科のみ」というようなイメージの払拭。
・総合的な学習の時間での言語活動をどこまで国語科が主導していくのか、理解を得るのに話し合いの場が必要になるため、実質的な活動に入るまでに時間がかかる。

⑥ 特別に支援を要する生徒へのサポート
・発達障害・学習障害と思われる生徒に対して他教科と連携し、言語活動の場面を増やす全校的な取組の必要性を感じている。
・本校では発達障害やアスペルガー症候群等の症状を持つ生徒に対する言語活動の充実のためには、教員定数を増加して生徒の実態に合ったものとすることも不可欠だ。

☆「言語活動の取組状況について」のまとめ

①国語担当者の「言語活動を効果的に取り入れた授業づくり」や「言語活動の新学習指導要領における位置付けや扱い」は概ね進んでいる。

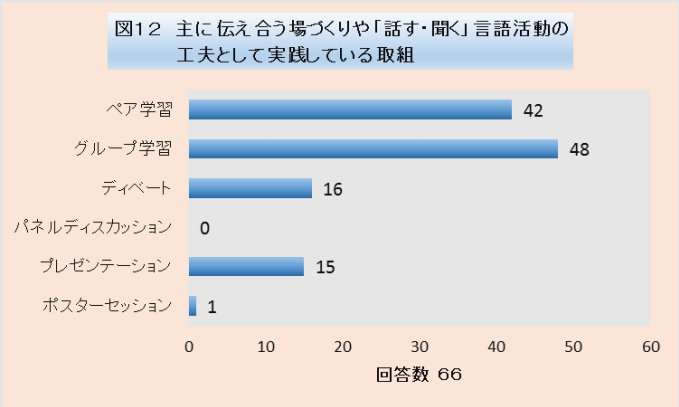
②国語科として年間の言語活動を全学年で計画している学校は３割。

③言語活動と「論理的思考力、表現力」「伝え合う能力」「感性や情緒」の育成との関連は概ね図られている。

④言語活動の新たな連携の強化、授業や評価方法の改善、国語科の役割の明確化が必要。

(3)言語活動の工夫について
（担当者のどなたかが実践していればお答えください）

Ｑ１　主に伝え合う場づくりや「話す・聞く」言語活動の工夫として実践している取組（複数回答可） ア　ペア学習　　イ　グループ学習　　ウ　ディベート　　エ　パネルディスカッション オ　プレゼンテーション　　カ　ポスターセッション



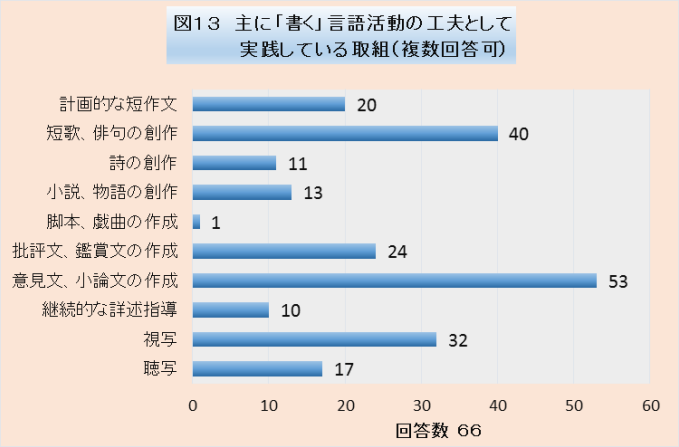
【結果分析】
●ペア学習やグループ学習は約３分の２の学校での取組が見られ、できるところから言語活動への取組が図られている。
●その他のある程度時間や準備を必要とする取組については、あまり積極的ではない。
●ディベート、プレゼンテーション、ポスターセッション等、様々な形態の言語活動は中学校までの既習事項であること、高校では社会人として必要な国語の能力の基礎の育成が求められていることを踏まえ、実践的な「伝え合う場」の設定に努める必要がある。

※上記回答の具体的内容やその他、工夫している取組があればお書きください。
【回答のまとめ】

ペア学習 ・ペア読み　・話し合う、聞き合う　・相互評価
グループ ・発問に対する話し合いや解答作り。　・調べ学習およびその発表。 ・和歌の解釈と鑑賞。　・ディスカッションを通した評論教材の解釈。 ・作文の班での発表と相互評価。 ・作文の推敲(グループで回覧して付箋にアドバイスを記入)。
ペア＆グループ ・センター試験などの問題の解法・解答の検討。 ・小論文の相互読み合わせと評価・感想の交換。
ディベート ・「総合的な学習」で取り入れ、「書くこと」につなげる。 ・読解を深めるための簡単なもの。 ・評論文学習後に行い、それを元に小論文を書く。 ・多面的な考え方ができるようになることを目標化。
プレゼンテーション ・ビブリオバトル（知的書評合戦） ・３年生の卒業前の入社後、入学後を踏まえた自己紹介。 ・百人一首（好きな歌一首）　・ＳＳＨの課題研究。

その他
・スピーチ（例：友達にインタビューして、その内容を一分間スピーチ）。
・人の意見を確認し自分のものと比べる作業を、授業中にひんぱんに取り入れている。
・話し合いに至るまでに、自分の考えを深めることを大切にさせたい。

Ｑ２　主に「書く」言語活動の工夫として実践している取組（複数回答可）
ア　計画的な短作文　　イ　短歌、俳句の創作　　ウ　詩の創作　　エ　小説、物語の創作
オ　脚本、戯曲の作成　　カ　批評文、鑑賞文の作成　　キ　意見文、小論文の作成
ク　継続的な詳述指導　　ケ　視写　　コ　聴写



【結果分析】
●「意見文・小論文の作成」が最も多く、８割強の学校で取組が見られる。
●「短歌、俳句の創作」が２番目に多く、約６割の学校で取組が見られる。
●感想文はどの学校でも実践があると考えられるため、回答対象から外したが、より客観性を求められる「批評文、鑑賞文の作成」は４割弱の学校しか取り組んでいない。
●「計画的な短作文」は約 30%、「継続的な詳述指導」は約 15%の取組にとどまり、創作も短歌、俳句以外の創作活動は全体的に低調である。「論理的な思考力・表現力」や「感性・情緒」の育成が単発的な機会にとどまり、計画的、継続的、組織的な取組はあまり進んでいない。
●「視写」は約５割弱の学校が取り組み、「聴写」と合わせて、語彙力や基礎的・基本的な国語の能力を身に付けさせる学習活動が広がってきていると考えられる。

※上記回答の具体的内容やその他、工夫している取組があればお書きください。
【回答のまとめ】

計画的な短作文
・単元ごとの２００字作文（評論）４００字作文（小説・随筆）。年度末に作品集を制作。
・一教材に一回はかならず短作文(感想、意見、批判等)を作成。それをまとめてマッピングしたものを配付し、客観的な振りかえりを実施。自分の意見がどこに位置付けられているのか、誰がどんな意見をもっているのかを知る。

短歌･俳句
・百人一首の任意の歌を三十一文字で訳。　・鑑賞文や鑑賞画を作成。
・短歌コンクール等への応募（地元団体や地元文芸協会、企業主催等）。
・俳句の推敲の授業で、１クラスに国語科２人を配置し個別指導の充実を図る。
・懸賞俳句の過去の受賞作品を鑑賞させたり、クラスメートの作品を相互評価させたりし、言語活動に関心を持つよう指導。　・農業祭に向けての短歌創作。

詩
・詩の解釈の後、その詩の一節を使った詩の創作。
・五行詩の創作。歌詞に描かれた世界のイメージを詩で表現。

小説･物語
・小説、物語の続きを創作。　・古典作品をもとに小説を創作。　・絵本創作

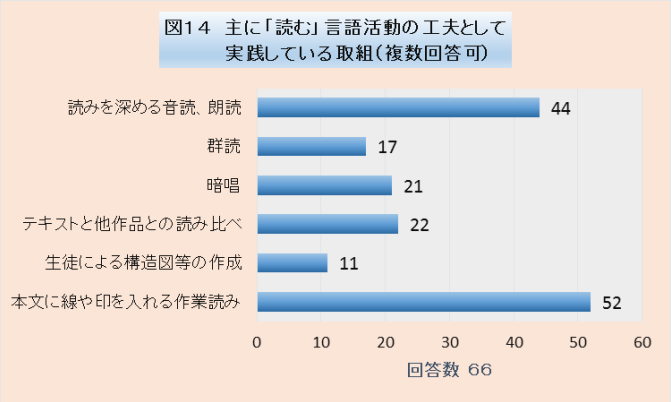
意見文・小論文
・新聞に投稿。　・新聞記事を題材として意見文を書く活動。
・総合学習の時間などで。　・ＣＤＡ学習との関連で。

視写
・素材の工夫（小説や評論文の重要な段落・新聞コラム・新聞の社説・古典文）。
・取組後の工夫（要約させ、意見文を書く）。
・国語表現と現代文で週一回継続的に実施。

聴写
・ニュース原稿を読み、伝達する時に必要な項目を記録。
・新聞記事を書き取り、要約を書く。
・聞き取り形式の漢字テスト（文で書かせる）。

その他
・手紙文の作成。　・中学校の恩師に手紙を書き、実際に投函。
・読書案内の作成。　・視点を変えて本文を書き直す。
・年に１回行われる「定時制通信制生徒生活体験発表大会」の代表者決定を目的とした、校内生活体験発表会の実施（生徒全員が自身の体験や思いを発表する場を設定）。

Ｑ３　主に「読む」言語活動の工夫として実践している取組（複数回答可）
ア　読みを深める音読、朗読　イ　群読　ウ　暗唱　エ　テキストと他作品との読み比べ
オ　生徒による構造図等の作成　カ　本文に線や印を入れる作業読み



【結果分析】
●「作業読み」の取組が最も多く、約８割の学校で見られる。
●「読みを深める音読、朗読」の取組が２番目に多く、３分の２の学校で取り組まれている。
●「読み比べ」は３分の１の学校で取り組まれている。
●読む力を高めるには、個々の実践において、論理性や感性をはぐくむ工夫が必要である。

※上記回答の具体的内容やその他、工夫している取組があればお書きください。
【回答のまとめ】

朗読･郡読･暗唱
・音読の繰り返しや、それを周りが聞いて評価し感想を書くこと。
・教科書の一斉音読、部分的にグループ音読。
・ゲーム的要素を入れた音読学習。勝ち抜きトーナメントなど（生徒による採点）。

・読解をもとに、強弱や間の取り方や読むスピードなどを工夫させ、発表会を実施（「徒然草」）。
・登場人物の心情を想像した上での、情感をこめた音読（古典）。
・短歌・俳句・漢詩や有名な文章（古文・小説等の冒頭文）を授業で何度も斉読させ、できるだけ暗記するよう指導。
・詩の暗唱。　・古典作品の冒頭文や百人一首の中の好きな歌の暗唱。

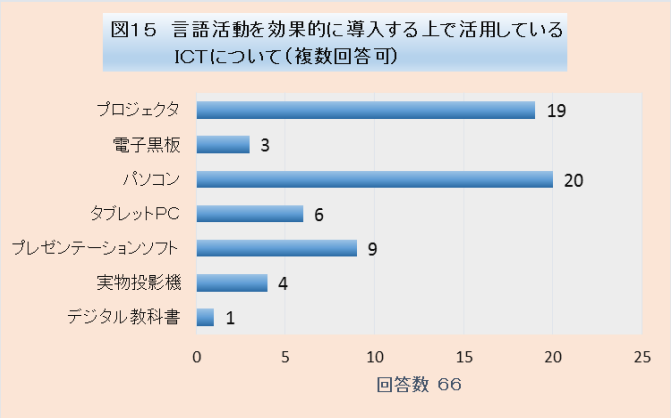
読み比べ
・「羅生門」・「鼻」・「山月記」等において、基となった古文・漢文との読み比べ。
・古典作品と同一題材の小説の一節を読み比べ（『史記』と司馬遼太郎の小説『項羽と劉邦』）。
・「性善説」と「性悪説」の読み比べ。

構造図の作成
・読解の鍵となる語句に注目させて構造を考えさせる。
・評論文の読解の際の文章構造図。　・小説の読解の際の人物関係図。

作業読み
・予習の一環として実施。　・線を引き解答の根拠を明らかにするように指導。
・教科書本文を印刷して、グループで段落の関係を考えて意味段落に分けた上でノートに貼ったり、傍線や印を書き込みながら読解し、余白部分に内容をまとめる。
・主題など重要項目に赤線。
・古文特有の言い回し等に対応するため、動詞、形容詞、助動詞などの品詞毎に色分けしながらノートを作る。

その他
・リポートの課題に、読みを深め自分で内容をつかむことが出来るような問を工夫。

Ｑ４　言語活動を効果的に導入する上で活用しているＩＣＴについて（複数回答可）
ア　プロジェクタ　イ　電子黒板　ウ　パソコン　エ　タブレットＰＣ
オ　プレゼンテーションソフト　カ　実物投影機　キ　デジタル教科書



【結果分析】
●プロジェクタやパソコンを活用した取組が約 30%の学校で見られた。
●電子黒板やタブレットＰＣなどの活用は、機器の普及の状況とも関連するが、あまり進んでいない。
●実物投影機は、使い方も簡単ですぐに活用できるＩＣＴだが、あまり活用されていない。
●ＩＣＴの活用は全体的に低調だが、今後、機器の急速な普及・整備に伴って、そのよりよい活用法の研究が進んでくると思われる。ＩＣＴを効果的に活用することで、作業時間の合理化や学びの協働性の向上を図り、思考力・判断力・表現力を伸ばす時間の確保や取組の充実につながる実践の工夫を期待したい。

※上記回答の具体的内容やその他、活用しているＩＣＴがあればお書きください。

【回答のまとめ】

話すこと･聞くこと
・ビブリオバトル（知的書評合戦）の際に、タイマーやプレゼンで使用する画像を投影。　・国語表現の授業で「修学旅行先のプレゼンテーション」を実施。

書くこと
・作文やレポート等を、パソコンを用いて作成させ、データ化。
・文章とビジュアルを組み合わせた紹介文、レビュー等の作成。

読むこと
・問題演習の際に生徒の解答を映し出し、本文に立ち返り深く議論するために活用。
・評論を読解した後での意見発表。
・PC 画面を投影したスクリーンを見ながら、要約や答案の添削・推敲をリアルタイムで行ったり、本文を投影して段落の関係を説明したりする。
・板書をスライドで作り、それを投影して説明に活用。レイアウトの自由度が増すこと、情報量が増やせること、見やすくなること、板書の時間が節約できることなどの効果が期待。　・評論の読解に効果的な映像を電子黒板で映写。
・タブレットＰＣを用いて、小説等に登場する事物・事象の画像を見せ、状況を想像しやすいように工夫。

基礎的･基本的事項　伝統的な言語
・四字熟語カルタのプレゼンテーション。
・漢文の導入期、教科書に採択されている部分以前の内容の紹介などのために使用。

その他
・インターネットで調べ物。　・パソコンで資料を作成。
・LHR や総合的な学習の時間と連携して行う機会では、PC や TV モニターを利用し、聴覚的だけではなく、視覚的にも理解が深まるように努力。
・国語表現で「本の紹介ポスター」を作成（優秀作品を図書館に掲示）。

Ｑ５　言語活動について、授業で導入する際に留意していることや「思考力、判断力、表現力」を高めるために工夫していること等があればお書きください。

【回答の抜粋、まとめ】

授業で実践していること
・話し合いの前には一人で考えさせる。　・文章で発表することを繰り返し促す。
・生徒の発言や書いた内容を板書して全体で視覚的に共有し、その妥当性の検証や推敲をグループやペアで行い、発表するといった活動を意識的に取り入れる。
・類語一覧を作成する。辞書を多く引かせる。関連する語を紹介する。
・活動の目的が、全員の生徒に理解できるよう、事前の説明を丁寧に行う。
・活動を行う際の留意点、学習のポイントを示し、達成度を生徒自身が理解できるようにする。

思考力・判断力・表現力を高める工夫
・「考えさせる→待つ→評価」のサイクルを大切にしている。
・生徒のレベルよりも高めの問いを設定し、議論を深めることで思考力を高める。
・「表現力の向上」については、詩作や朗読など、教員も一緒にしてみせる。
・２年次の古典の授業中に生徒に作らせた作品を匿名の形にして相互評価をさせた。匿名での相互評価は自分の作品がどう受け取られているかがお互いに分かり、書く

ことへの自信と学習意欲が少し高まり、相互理解も深まった。
・自分の考えをまとめさせる前に、条件（この内容をふまえる、この知識を使うなど）、発表するときのルールと目標（主語・述語をそろえた文を意識する、書いて提出かみんなの前で発表かなど）を明示し、考える取っ掛かりを与えることで、十分な準備をして発表ができるように支援する。
・表現活動を行う際、ある程度模範は示しつつも、創作における自由度を高められるようにしている。
・視写は、必ず原稿用紙に振り仮名つきで書かせている。振り仮名をつけることにより漢字能力がつくとともに語彙量も増える。原稿用紙の使い方を身につけさせ、筆者の表現力により思考力・判断力・表現力が高まることを狙っている。

基礎的・基本的能力の育成

・基礎・基本の語彙力は、週末課題等で対応している。
・基礎学力・語彙力不足を補うことと、達成感や充実感を抱き学習に対する自信を持たせることを目的に、国語科では１年生は学び直し学習教材を授業の一部で利用したり、他の学年では小学生用ドリルを利用したりし始めた。また、アルバイトをしている生徒も多いので、正しいことば使い、話し方、聞き方、応答の仕方も意識するよう指導している。

★「言語活動の工夫について」のまとめ

①伝え合う場づくりや「話す・聞く」言語活動の工夫はペア・グループ学習中心。

②「書く」言語活動の工夫は「意見・小論文の作成」と「短歌・俳句の創作」中心。

③「視写」「聴写」を通した語彙力の強化等の取組に注目。

④「読む」言語活動の工夫では「音読・朗読・暗唱」と「作業読み」が中心。

⑤言語活動でＩＣＴを活用している学校は約３割。

５　今後の取組に向けて

本アンケート調査を通して、国語担当者の言語活動への理解度の深化と様々な実践上の工夫が明らかになった。特に、言語活動の実践例については共有化を図り、各学校の実態に応じた取組の参考にしていただきたい。

一方で、語彙力の不足や読解力の低下等が見られる生徒の実態や言語活動における計画性、組織化や連携、取組内容の多様化、ＩＣＴの活用といった面での課題も浮き彫りとなった。今後の改善に向けた取組を具体的に進めていく必要がある。

現在、本県においては、「言語活動の充実」と「ＩＣＴ教育の推進」が教育施策上の大きな柱となっている。グローバル社会や情報化が進む今世紀にあって、よりよく生きるための「確かな学力」を子どもたちに身に付けさせるためには、この二つを効果的に結び付けた取組が必要である。ただし、言語活動やＩＣＴは、子どもたちの思考力・判断力・表現力や伝え合う力等を高めるためのツールであり、社会的、実践的な場面を想定した取組の工夫を図る一方で、個々の子どもたちがより深く思考し、表現を推敲するといった時間を確保するなどバランスの取れた取組が重要である。

本アンケートの結果や分析をもとに、言語活動の充実に関する今後の取組の方向性を次のようにまとめてみた。

【言語活動の充実に関する今後の取組の方向性】

①言語活動の年間計画や３年間を見通した計画を、年度当初または前年度に立てる。

②国語科で取り組んだ言語活動の内容や情報を他教科や学年、関係分掌等と共有し、活用を図る。

③国語科の取組を基盤として、言語活動の連携を図る校内組織を構築する。

④言語活動の効果的な活用に即した授業改善や評価法の工夫を図る。

⑤ペア学習、グループ学習を発展させ、社会人として活用できる実践的な場面を想定した伝え合う場の設定を試みる。

⑥言語活動の多様化とともに、思考力・判断力・表現力の向上や感性・情緒の深化を図るための言語活動のプロセスにおける組織化・構造化を図る。

⑦特に他者を理解する力や文章読解力を高める言語活動の工夫を図る。

⑧視写や聴写など語彙力・漢字力を高めるための取組の工夫を図るとともに、読書の啓発や読書体験の共有を図る取組の工夫など、読書に取り組みやすい環境の整備に努める。

⑨言語活動とＩＣＴを効果的に結び付けた取組の工夫を図る。

⑩言語活動の継続性、発展性を図る上から、中高連携のより一層の深化を図る。

最後に、国語科主任をはじめアンケートに御協力いただいた先生方に御礼申し上げます。お忙しい中、言語活動に関する実態や状況について、丁寧に回答していただいたことで、今後の言語活動の在り方に資する結果分析ができました。本アンケートで得た結果や分析、今後の取組の方向性等について、各学校に応じた言語活動に関する計画立案、学校組織における連携強化、授業改善等に生かしていただけると幸いです。